

羣書備考

一

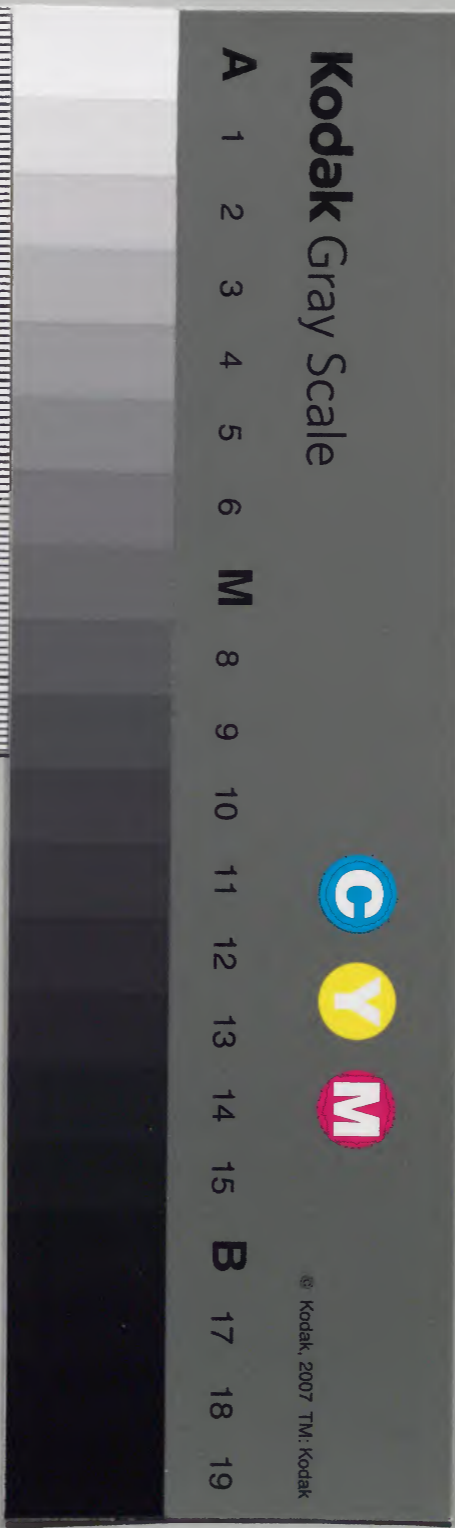
| | | | | |
|----|----|------|---|-----|
| | | | | 和書門 |
| | | 一八六三 | | |
| | 二二 | 一三 | | |
| 二二 | 一三 | 一三 | | |
| 冊 | 架 | 函 | 號 | 類 |

| | | |
|------|------|----|
| 庫文閣内 | | 和書 |
| 二二 | 一八六三 | |
| 二二 | 一三 | |
| 架 | 冊 | 號 |

| | |
|------|----------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 18663 |
| 冊數 | 23 (4) |
| 函號 | 218 76 |

類錄卷之三

類



羣書備考卷之一

野槿

林道春撰

久保之取蛇尾

入江

三雅

子海

子海の抄は中槿と云ふ

形大抄に目録に云ふは又抄に身才五不中槿と云ふ

形大抄に目録に云ふは又抄に身才五不中槿と云ふ

形大抄に目録に云ふは又抄に身才五不中槿と云ふ

形大抄に目録に云ふは又抄に身才五不中槿と云ふ

形大抄に目録に云ふは又抄に身才五不中槿と云ふ

海子

一 日書に海子の字序論の... 和泉式部集に海子の...

淺草文庫

是の撰
日皇御好
人々
高趣
文義
述作
久し
深

草振部類
新正御札

詩經
一
書
春
風
吹
金

硯北漫抄
東福寺
記
平
生
の
事
を
記
す
の
書
也

性靈集

性靈集
紅法
の
文
集
也

寸鐵銀

逐原許

藤原南拙

日書
性
靈
集
の
語
を
寸
鉄
銀
に
記
す
の
書
也
假
名
の
註
也
也
並
に
寸
鉄
銀
に
記
す
の
書
也
假
名
の
註
也
也
假
名
の
註
也
也

康談... 藤子...

作物記

惟高松

日書... 惟高作物記... 時... 三...

張石岩飲

秋方秀松

日書... 張石岩飲... 秋方秀松...

天津室号記

秋高松

日書... 道真... 秋高松...

註

書巨... 秋松

日書三秀次開白の行註百十番の註を〜〜〜五六の
僧寂相國寺慈照法師の註を〜〜〜書あり〜〜〜
唐のころ〜〜〜遊子伯陽の月夜意〜〜〜
〜〜〜船の事公〜〜〜書〜〜〜
〜〜〜不審あり〜〜〜俗間古今和者集の註
又註あり〜〜〜俗書あり〜〜〜皆大あり〜〜
〜〜〜詩元信
〜〜〜大佛の辺に〜〜詩元信
初舟を初〜〜舟〜〜毛破意也
書ふ〜〜行符ふ〜〜言上り諸人其本を

〜〜〜博隆〜〜不註同〜〜
伴の字を〜〜唐本の〜〜舟意也の三
字を細字小字〜〜書入ら也元信面目を失〜〜
又ハ抄頼風子脚危の〜〜海草〜〜所ハ有子〜
寺の雄長老の語〜〜此長老の註の註作〜〜標
準也

蓮徳録

藤原前松

日書三秀次開白の文章二字同續集文章可辨体を取合
〜〜文集を〜〜論語詞達而之書有徳者必有言〜〜
蓮徳録と文月朝辭の蓮士義沆其序の書あり

日本伝

秋月岩松

日書之雄奇感... 日本... 奉伯... 伊勢... 三種... 奉伯... 日本... 院...

草根部類

日書之微... 草... 人... 二... 夫... 夫... 夫...

二... 類... 招... 原... 其... 其...

秋... 天... 七... 小...

秋... 天... 七... 小... 秋... 天... 七... 小...

大...
...

唐詩選訓点

服部元奇社

近川隨筆 韓南郭先生の唐詩選訓点大方詩意小抄
...

鳳梧隨筆

...

珠蘭遺言

新井法雄

有斐齋刻 龍巖 白石先生曾与紅毛會同西洋諸國風土及物
産物等之珠蘭遺言是也

百馬圖

林道春贊

狩井為信畫

百馬圖 馬の毛色を合意するものとして和漢の
諸説を出し... 虎光將軍
の命を奉り... 中林乃春贊 狩井三馬為信畫 百馬
圖 當時狩井のの秘書の中あり

後三年奥州軍圖 三卷

飛騨守雅久画

百馬圖 後三年奥州軍の巻物三卷 高橋若根守也...
...

六

書中不大方に狩り多し又おかしき狩りあり...

いふ鑑の端々少くも目新島稲子の上下ありて
著るものありて少くも大らて書目表次
送りしものありて少くも大らて書目表次

扶桑異記

仲子語録三傳の抄、扶桑異記と書能御米倉の時の事
多しなり

新撰字鑑

曰書新撰字鑑二冊和名集の類、字書ありて漢名カヤミ
飛名ハラヤミ、飛名エヤミ、新撰カカラヨエキ、訓
ハ未見と云ふあり

外代卷

半宵談云外代卷と日本書紀三十卷の篇首を異世なる昔

〜〜今人親王太子摩多相説の上古事記の趣向上文を御
ま如く書く者〜〜事莫三史又華七史不相見の書あり
一因ふ〜〜取捨〜〜是事
実日本の子始故〜〜信〜〜親〜〜朝〜〜行〜
義論〜〜法華經〜〜龍宮の書あり
大宝積經〜〜カヤミカヤミ〜〜流拍受〜〜三輪カ
假〜〜大正貴命〜〜カヤミカヤミ〜〜識者のたふ不我徳不
も〜〜行〜〜カヤミカヤミ〜〜云

日本書紀

曰書正茂何と日本書紀の正と後世〜〜付たなり

明月記



あはれなるものか、倉山先生の遺稿を、巻末に、
降子不を、行形を、百枚押し、是を、
何と、
以下百首、
定本、
骨、
七、
古今、
長、
入

征州坂田家書簡

初立松

日書、
入、
平、
の、
摸、
不、
息、
た

玉葉

日書月輪殿下兼実公の御日記玉葉不立自註云二卷殿
玉葉殿

中右記 二十卷

日書中御門右大臣御記立自註云玉葉殿二十卷
中御門右大臣御記立自註云玉葉殿二十卷
中御門右大臣御記立自註云玉葉殿二十卷

園大曆

日書園大曆云云 中園大政大臣公噴云の御日記云

明律考

物茂御記

駿遠隨筆 宣直云長壽の詠可園身嘉慶多々後之詞
御記云通云云 事跡不詳云々 時々余を詠し其人

放達云々 事を好むなり 唐語云々 云々 云々
人集不文云々 小説の書を読む 六百部云々
勤人云々 事跡不詳云々 時々余を詠し其人
氷河身金旗梅の御書云々 御書云々 御書云々
書云々 事跡不詳云々 時々余を詠し其人
事跡不詳云々 時々余を詠し其人
事跡不詳云々 時々余を詠し其人

訓園集

園卒宣就記

日書云余童稚頃江州の根の島に園卒宣就あり
人し値照宣卷多々 宣就年時多々 宣就年時多々
宣就年時多々 宣就年時多々 宣就年時多々
宣就年時多々 宣就年時多々 宣就年時多々

+

又と祝詞... 是又亦... 善言也

大和魂

松岡文雄松

曰書松岡文雄は尾州の人... 加流の沖... 可取之其外聊の著述也

風水神

山崎嘉松

曰書嘉白川... 近頃復是打着... 風水神は久積... 失くさる

津道奥初

台梅軒幸元松

曰書予津乃奥初... 後記行

日次紅筆

雁州府志

里川道旅松

曰書此室の比洛... 日次紅筆... 同心... 鏡神

花岡合

中江藤樹法

曰書中仁句云藤樹法... 徳行... 賢徳...

思不可議

曰書云遠近軒... 明憲... 思不可議... 徳行... 賢徳...

音記

高徳貞徳

曰書云遠近軒... 音記... 高徳貞徳... 徳行... 賢徳...

四言教

講義傳習録

整頓易解

三輪根角法

曰書云三輪根角湯明字... 講義傳習録... 整頓易解... 三輪根角法... 四言教講...

喫茶活方三卷

僧元旦法

曰書云喫茶活方三卷... 僧元旦法... 珍書名...

珍書名

同書五抄書名 長久遠失多

徒然草

方丈記

四季抄

偽

同書武後雜草五卷の許ふ事好く文もよく
名人のしるす所歎くもあはれきり鴨長明の撰
と云ふ事ありて方丈記とて名もよく
四季抄抄本極不安し偽書ありて字句もあはれきり
又向ふもよく

傳通記十卷

敬喜義

行基文

良忠上人撰

釋教

了意上人撰

同書武後雜草五卷の傳通記と云ふ事好く
名人のしるす所歎くもあはれきり鴨長明の撰
と云ふ事ありて方丈記とて名もよく
四季抄抄本極不安し偽書ありて字句もあはれきり
又向ふもよく

神代記

相珠新并三抄神代記不切徳ありて人々もよく

今もよく

假字集

同書武後雜草五卷の傳通記と云ふ事好く
名人のしるす所歎くもあはれきり鴨長明の撰
と云ふ事ありて方丈記とて名もよく
四季抄抄本極不安し偽書ありて字句もあはれきり
又向ふもよく

志

曰書北畠准后親房の職原抄北親記と書十二巻あり是を
 親房の日記あり其書三巻一曰在常州二曰田城守三曰官職之
 書及神皇正統記而以中原慶康献新帝云云持て之
 たりと云ふ

曰書北職原書八通あり親房の長男伊勢國司顯
 統御司等の本皇子孫權中將教皇の自筆の本曰村
 親の本北畠分りの本造等の本一条輝尚の御本
 中流等の本室所等の本伏見宮の御秘板今の板の本
 ありと云ふ

曰書職原抄三本ハ後人の加筆ものなり親房御自筆
 本ハ何れも題あり一曰論上下二巻一曰不分唯一冊
 一曰有等々古名の本御の本抄あり一曰山故等相廣

皇御の御抄あり是所以者何字今の職原抄
 官位抄或は明職抄流職抄あり一曰題あり一
 様あり

古今和歌集

漱石と云ふ神祕 高峻唯 祇父者 云往貫三の古今集を述べて
 明書に用ひる古今集の本序を續萬葉集と云ふ
 一ハ一萬葉集の拾遺あり一ハ神書に用ひる書
 一ハ一明あり一ハ後小兒女子の本も亦文字亦字
 一ハ一序あり一ハ文章あり一ハ一語又小説あり一ハ一
 一ハ一古今和歌集と題あり其本は一ハ一今世に又
 字の古今集の序あり一ハ一續萬葉集の後面
 目録あり一ハ一を序の漢あり

二

鎌倉分限帳

同書大及三日月の本をて入所縣の割り母の州郡
 小加の月及田をて仰止の及田をて所持したる
 大及の呼子とて鎌倉の世にて秩父三浦後京の
 及田をて持たる人あり鎌倉の世にて封建の割り
 然るに今人鎌倉分限帳とてあり傳ふに後爲
 作あり鎌倉の世に今世の初度ありありありあり
 然るに今世封建の事とてありあり大勢危き大及
 作ありありありありありありありありありあり

文徳天皇

同書文徳天皇御記刊行の本院簡記諸事
 今より後訂りては其書本に成りたり

装束拾字

母本正統多田今や不才書に桃華葉葉一年殿多模
 一書入るあり

井上正統記

源親房記

外学類聚編

藤浪時經記

同書此項神学類聚編と書きしは十條系親房の外
 正統記と書きしは源親房の外正統記と書きしは
 藤系親房と書きしは源親房の外正統記と書きしは
 御屋徳の御官系藤浪時經と書きしは源親房の外

徳然草鉄槌

貝原篤信様

同書見本先生の農業全集は民間に利益ある書である
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり

幽園集

高川惟三様

同書見本先生の農業全集は民間に利益ある書である
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり

同書見本先生の農業全集は民間に利益ある書である
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり

東行日記

信長日記

お通様

同書見本先生の農業全集は民間に利益ある書である
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり

大切真願記

同書見本先生の農業全集は民間に利益ある書である
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり
と云ふ所讀するに益ありと云ふ所讀するに益あり

例
二十

更業而已其傳奇小說而已其甚其叙事且不似傳為何
在乾初善德思以衣敝衣也特衣猶得家有神皇正統
記三編揭成意而振頹風亦系循而警其執謹議草識本
諸思居憂時之誠是書雖各異言難靡美始可與言春秋遺
意而三

聚分韻畧

秋師陳拙

古今括韻開合圖應引云我邦元事之間秋師陳拙聚分韻
畧四色統計為一百十有三韻不知其所撰華夏歷世治韻字
者何翅數千家韻籍殆數千卷未聞有如聚分韻者特性
本邦教而載乎此韻焉詩家玉律也

列韻遺序云伏城序云我邦元應朝河記錄云拙聚分韻畧或

一二五脫有不同軌復以訓詁聚分是珠匪韻書之作製其辭
遂至文雜同音者分府市以為別音至軸珠異清濁雖然
教不載于茲學者靡思從之而弗敢疑何也
曰書凡例云本邦以聚分韻畧者為詩家定韻之久其是為
書也分主門而小訓詁類聚不同是音此故同音字分之數所
大溢於韻書作格其弊至不非同音字或謬為異音復立韻
不吉而鞅三意排行間有亦庚者
曰書凡例云聚分韻畧以平上去三意排行不屬入意附三後故入
意入失而亦非韻書之三

寬永系圖

大室國史三林信勝字子信征州人也幼從父至京呼八歲善誦
書年十三遊東山遂受友春秋于膝前以首者羅仲素幼說

春秋孟維淳山之下也居其北也以崔山常呼之不見神祖寬永十八年命松諸縣奉者太田資宗為總裁信勝春勝劉三諸學士著作徵尾水諸王上山高野之傳書成春勝之力多其資宗王諾身也

杜之記

林信馬松

曰書之林信馬字直氏嗣父勝叙法印加弘又洗學士為人質直不能遷怒任情不脩辺幅以故多親愛之者或以趨勢利毀之作又自解名曰杜之記

信長記

大岡記

小瀨道喜松

曰書云小瀨道喜上丹人也初事堀尾氏于豐明堀尾氏嗣絶道喜後易江都云曰市廬子會水道新成水道者通渠地中而為井也明德三年二月朔道喜語其所喜曰望土氣有祝融之禍起于西北散于四方今主之類殆無存者且夫天至水地六成之地二生火天七成之夫天生水以潤地也主火以報天也今地以人力通水而增地之陰天將假人力作火而增天之陽也陰陽之氣永生成之理是祥幾成不出于此月奉家歸鄉聞者無以不為狂夫二旬火果起人馬死十餘萬道喜又聞知織豐間事今所在信長記大岡記道喜所著也

大疑錄

貝原好古松

曰書云貝原好古者大疑錄曰大疑則大金小疑則小進無疑

不能進

芝山會稿

大高森明撰

曰書大高森明也為土佐頭德森明遊于洛呼谷松亭
成華京兆尹初業已通不久去適岩城仁為大夫兼世子傳世
子庶傷不職而去事豫松之後自行人為馮者判家規曰
受祿用之不過十之三其餘宜在外後遂貧致為臣而去者
芝山會稿記南學之始末元祿末元會稱曰學士芝山清如來
為對偶三鋒欲變文人三曰曰世間或學韓愈曾等指以
為狂然百年之後必有知我言者

大學明德說

精獻遺言

曰書之淺見安細有以守正講經宗師才子有倦色屬辭
責之不少假借稱焉今張樞渠也著大學明德說精獻遺
言

政談

物政卿松

曰事是菽生及松亭為卿德宗立命政卿曰讀六諭賜衣宮
中勤以政之得失乃錄可施行善道者上之曰曰政談政卿卿
事故旁通百氏文武全才也享年七十一是前殿立明年
死無子子姓道滿濟

日本書紀

本朝德宗傳巨仁仁巨仁日本書紀又為學古續史筆力非前
以及是吾朝之史記

律令

曰書刑於王文武帝之子也文武朝為知大政官事大聖四年初
刑部親上藤原史下毛野吉磨等編律令論曰先是高市皇
子德積王心壁王為知大政惟學成而堪其職者乎然未考三
事實故闕之以俟後君子

曰書藤原不比等或曰史知訓同錄是子也元明朝去冷舍人
王石上磨執朝政養老二年奉元正初再補律令各十卷
庚申四年秋八月薨壽七十二謚文惠公食封于江州故律淡海
公論曰律令格式政安之書歷代規之律三官刑令述政命

日本記三十卷

系圖一卷

曰書舍人王天武子也文武廣聖元年賜封二百戶應元明元正

朝為知大政官事位極一品養老三年詔曰中世政綱近江帝
復與藤原朝損益今大子歲稚未用政道二親王王氣宗室
駘輔洪胤正納清直乃賜內舍人大舍人四人衛士二十人封八百
戶於舍人王庚申四年奉詔三死清人大安磨等編日本
記三十卷系圖一卷天平七年又十一月四日薨壽六十一祠神
於藤原淡路麻布者舍人子也因舍人諡盡敬天皇其子孫
清原姓云記曰日本紀又富字吉續史筆力非所以及是也朝
史記

格式

曰書藤原冬嗣錄是之為內磨子也為人美才偉略好學弘
仁十一年奉初年大學寮儒臣等編格式許多卷其序載在
本朝文粹十二年大學寮之外更建勸業院壯儒學天長

三年 荒年 國院 大臣

合義解

曰書云清原夏野一名繁野父小倉王祖御原王御原若廣
希之身令人之子也夏野仕差我淳和至右大臣天長十年
授合義解奉之承和四年荒

類聚國史

曰書云菅原道真菅原姓者正哉勝尊之身天德日命之
為也其後其見為稱兼仁希朝司土直陶者希賜土師姓掌
監至清公賜菅原氏公子是善善之子道真也寬平四年
初道真令編類聚國史延喜三年荒壽壽九

西宮飲

源高明世

曰書云源高明醍醐子之正身也冷泉朝為左丞相和元年
藤實親與源滿仲僧蓮茂等謀謀而貶高明于太宰
府令別髮燒其家天祿三年省令歸洛高明別政事
著書曰西宮飲

續日本紀

曰書云津真道津姓也壬午之季子延應九年真道賜合義解
奉初編續日本紀歷任從位上階書類集字字士伊豫守
弘仁五年卒歲七十四真道心判詩有辭臣速聖造唯右
歲寒心向志烈氣象見

日本紀

曰書云純淨人元明朝為大學博士和銅七年賜教百解斛
於淨人寺而賞學切養元元年賞賜同四年賜淨人寺

手布帛財等至武朝為位下武藏守日本征之編述淨
人預焉

後國集
合義解

曰書南弘貞坂田奈豆磨之子視本公名三孫也弘貞博覽
其名彰聞淳和朝獻經國集二十卷弘貞及良本安世等
選之又于清原夏野編合義解

貞觀格

曰書清和朝南年名及南無也大教音人等奉詔編貞
觀格

都氏文集

都良本撰

曰書都氏又業神三為也良本始名言道文曰業原腹

赤貞觀十四年渤海使來聘巨文雄良本等撰三元慶

三年卒至文章博士從五位下大内記越前介菅道真

師良本又有都氏文集傳于世

橋氏文集八卷

橋屋相撰

曰書橋姓敏達為諸元後之屋相又久得覽訓同父曰卷範
屋相幼而穎悟九歲昇殿賦詩長而博學貞觀十四年
渤海使入貢令相尋餐譯十七年皇太子讀千字文相為
侍讀兼宮學士寬平二年卒神正三位中納言相有橋
氏文集八卷其中燈前教行屋氏派之句膾炙人口

日本後記

徑國集

秘府畧

曰書之滋於貞王天道限命之為出天御中王命祖曰橋原
東人父曰家詠東人為大學頭名儒也仁明在儲之時貞王為
東宮學士又奉勅御日午後仁澤和朝奉經國集及秘
府畧一卷又諫奏便宜十四卷仁壽二年卒年八十有長
六人守至卷議正四位

東宮切韻十卷

銀陽翰律十卷

集韻律詩十卷

會分類聚七十卷

菅原善德

曰書之管是善清公之子也承和七年卒春澄善德等諫奏

惟宗之事清和帝學群書以是善為師乾元慶五年

卒至卷義刑部卿位三位平日所述東宮切韻二十卷銀陽

翰律十卷集韻律詩十卷會分類聚七十卷

貞觀格

群書要覽

弘壽範

大枝音人松

曰書大枝音人本主之子也菅原同祖齊衡元年奉勅許重

陽等詩清和朝為侍讀子諸儒其貞觀格元慶元年群

書要覽弘壽範等音人作也

江次勇

江談

江都督集

江匡房撰

曰書云江匡房其祖序周且父成行也幼穎悟長德量博學
宏才狂步今古後三條帝在儲宮之時為師談脩德治國
之要即位之日存革弊改天下大治帝躬書奉伊勢書
又書中有我即位以來未嘗為一事之非之語匡房諫曰
有得藤實政超擢元隆方帝悔而改其書曰河帝欲令太
子之外房源顯房超元隆房匡房諫止嘉保元年為中納
言承德二年出為大宰帥康和四年歸嘉承元年再遷
大宰府天永二年卒歲七十一世孫江都督又稱江師
其書有江師茅江談江都督集許多卷

康翁註

中余康翁撰

曰書云中余康翁安寧子帝之子磁城津房為中余祖康翁
作日記教十卷

貞觀格

曰書云弘宗者近貞觀格之一人
新字早卷

曰書云天武十年初境部石積寺令製新字乙早卷

武門要鑑抄

流華記伊勢武門要鑑抄書諱信諸臣軍法兵術小同
冬冬秋實錄也三也偽書也實武承天永承
浪人作也甲州流小知勅意景意高甲湯年鑑偽
作也後也布也北也南也

奥州後三年合戦繪

同書奥州後三年合戦繪古記承安四年三月十七日甲辰の
祭三拾遺集臨馬見中繪所招引也件繪義家朝臣馬陸
奥守之時子彼國任人武衛家術等令戦繪也件事雖
傳言多不記又不盡靜賢法印元年奉流道始合盡也彼
法印借出御倉道三為消徒然狀。又不益の盡の字も盡の
了道三の道の子も送り了。古記も權中納言陸房
卿之記也見于本朝書新目錄古部初刻
以人の記也

太子傳二卷

平今撰

同書太子傳二卷平今撰也。其書多知りし古書也
〜〜人もの〜〜書佛法不滅也人の作りて聖徳

太子の行状多記も奇怪毎の事も述ぶる信用も不
足す書もの事不行し證もなし佛者三説理好の
事説も〜佛の妙智力神通力不可思議也〜貴
き事〜佛者の行〜人にも賤〜事〜也

弘安社節十二卷

同書十二卷の弘安社節事無考。前司いんも新井近
後身と水戸の儒臣安積寛喜との間も安積寛喜
書名新字も尚と云ふ其書十回弘安社節の事も
弘安の節の事も〜〜脱考の節も〜印
年の節も集末及人の節も節の節も〜
節も〜〜關字ノ法も終〜總十二卷迄も〜文祿三年七月
下旬〜〜弘安社節事実傳〜署〜押字も亦書も是故

日書に人事記と云ふ事無きなり右日書曰人事記は
 身事年之年前年奉使留日寛文三年御用に於て
 人事記と云ふ事上方にて是より重んずる書也
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は

人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は
 人事記と云ふ事一巻ありしに其書は

摩子の名をいへんはむらさきの月影の七八百
身もあのおもひの程をいへんはむらさきの月影
書

梅花無盡藏

曰書云梅花無盡藏年昔云ふ行たる右曰書曰梅花無
盡藏はしるし口身之象也此の書其元來不知
其内の如し今地はしるし口身之象也此の書其元來不知
の若しと身は世にありて今合の徳を借らるゝ電覽
此方の月をいへんはむらさきの月影の七八百
何れに書かざらんはむらさきの月影の七八百
貞又云梅花無盡藏はしるし口身之象也此の書其元來不知
道源不建はしるし口身之象也此の書其元來不知

多梅花無盡藏はしるし口身之象也此の書其元來不知

千里万里はしるし口身之象也此の書其元來不知

自云云はしるし口身之象也此の書其元來不知

南朝伝傳

南朝伝

南朝事蹟

櫻雲云

吾好拾遺

南木色狂

尚

三

曰書云南朝伝傳又南方伝傳はしるし口身之象也此の書其元來不知
其内の如し今地はしるし口身之象也此の書其元來不知
の若しと身は世にありて今合の徳を借らるゝ電覽
此方の月をいへんはむらさきの月影の七八百
何れに書かざらんはむらさきの月影の七八百
貞又云梅花無盡藏はしるし口身之象也此の書其元來不知
道源不建はしるし口身之象也此の書其元來不知



南朝江南朝事蹟... 書元... 偽撰... 南朝... 漢義... 櫻雲... 武行... 偽書... 南朝... 櫻雲... 武行... 偽書... 南朝... 櫻雲... 武行... 偽書... 南朝... 櫻雲... 武行... 偽書...

三河後風土記

平岩親吉撰

徳川歴代

大瀨賀康高撰

三河後風土記... 徳川歴代... 大瀨賀康高撰... 櫻雲... 武行... 偽書... 南朝... 櫻雲... 武行... 偽書... 南朝... 櫻雲... 武行... 偽書...

三五

河務五部書

口書此部書は日本往古事記古語拾遺中位後おしむる
あり古書也信しむる一筆記并小伊勢の五部書等ハ偽作也
其外事書しむる佛法を文しむる作らるる偽作を以て
作らるるあり陰陽の文しむるあり左の三道ハ一
兼し作らるるあり又伊勢の事ハ陰陽五行相
惑ハ陰陽の事ハ陰陽の類あり若しむるあり
信しむるあり

大和本位二卷

聖徳太子撰

口書大和本位聖徳太子の撰しむる二卷ありしむる
ありしむる之語由拾遺抄ハ大和本位ハ行らるる其文ハ曰

陸奥郡外到近江今者中ノ道ニ面國也此ノ國ニ奥
故名紀國之ニ奥又ニ事後作陸しむるあり其方兼身不
陸奥ありしむるの事ハ其しむるの事ハ其しむるの事
爲ハ此ノ事ハ陸ハ其しむるの事ハ其しむるの事
ニ事ハ其しむるの事ハ其しむるの事ハ其しむるの事
不害此ノ事ハ其しむるの事ハ其しむるの事ハ其しむるの事

合人親王撰

伊勢貞天撰

口書日本書紀伊勢貞天撰伊勢貞天金十卷
身しむるの事ハ其しむるの事ハ其しむるの事ハ其しむるの事

今世の世に... 強なる説あり... 潤屋の... 三箇の... 知... 多入... 目...

海舟物語

日軍は海舟... 知... 代... 臣... 朕... 今世の世に...

身... 書... 常... 義... 天... 後... 今... 人... 今... 今... 今... 今...

三
～～～
觀之の化才も亦は
かゝりていふ可なり
其の即是空煩煩即其理の
小人も大才者たるも
其の理も亦は
～～～
狐の類も亦は

大系岡
極論語
江洋式鑑

神宮雜事

口書大系岡和齋江洋式鑑の口作偽書也切用

稱呼其口書神宮雜事之口書不同是非非口隨
事隨記者也

中國并

淺見守正撰

口書細荷先生著口族并證今行于世

口族并證

口上

口書自註細荷先生著口族并證今行于世

口族并證

伊藤真撰

三
口書自註細荷先生著口族并證今行于世
細荷先生著口族并證今行于世
和久分之大作不能據此義他指而土稱中華稱中國

誤也蓋西土人自稱中國稱中華固其所也此方人代其人
說其書則姑用其稱可也然國典論則崇稱西者稱西土
稱東方稱漢土稱唐山蓋明朱舜水未住于吾國指故國
稱唐山而不稱中華可謂知恥也然倭儒反恥不分可怪其
他有三不可議者今不贅及

芝山會稿

曰書曰大禹坂氏芝山會稿論及華之義同語曰曰竟恥
文三小蓋無原道義之大作各自隨見並行無害也友信謂芝
山者為朝之才而信程朱之學然不省忠分最原道義之
大作故西都東都室祚等之稱呼至於錯亂失大義也可
嘆也夫

和釋文會

留身友信稿

曰書自註三句同和釋文會中有稱稱呼亦詳附錄者句
也曰作本之曰及後改曰作呼并也

狗幽探附錄

山奇嘉松

清猷遺言

淺見安正松

曰書自註三句同和釋文會中有稱稱呼亦詳附錄者句
也曰作本之曰及後改曰作呼并也

非大葬論

安井真祐松

曰書自註三句同和釋文會中有稱稱呼亦詳附錄者句
也曰作本之曰及後改曰作呼并也

三

謚考一卷

淺見安正撰

謚稱考說卷

岩崎修敬撰

曰謚者有美謚惡謚履謚卑謚私謚之別如是其非則先
賢論之正評其細有先主著謚考一卷又岩崎氏著謚稱
考說一卷余校讎合為過一書讀者從此卷考則庶乎
得謚法之要旨矣

新字

境部石積撰

佚

日本儒林傳稱曰境部石積者孝元皇子大彥之後也其
先皇奉帝時奉詔建國境之程因賜姓坂合部後世稱

境部天武十一年奉詔制新字四十卷已不傳用
撰既屬今猶存數字善其遺傳也

律

令

曰書是藤原不比等奉元天皇禪皇次子也昔有所遊養於因
近史大隅家因以久為之長孫讓志正元月博覽無所
不通號元為尚史嗣父後天武四年與刑部親王下毛古
麻呂伊吉博德伊奈部馬養等奉詔定律令大室
元年始成律六卷十二篇曰名例曰衛禁曰職制曰戶婚曰
厩庫曰擅興曰賊盜曰關訟曰詐偽曰雜律曰捕亡曰斷
獄令十卷曰目三十曰官位曰職貢曰後宮職貢曰東宮
職貢曰家令職貢曰神祇曰僧尼曰戶曰田曰職役曰學

四

曰遠叙曰德謂曰考謀曰祿曰官衛曰軍防曰儀制曰
服曰掌禮曰公武曰倉庫曰廩收曰醫疾曰假寧曰公武
曰倉庫曰廩收曰喪葬曰國事曰捕亡曰獄曰雜蓋篇目
一準於唐律損益裁制以布行於天下卷之二年再
奉詔補修律令篇目仍前各為十卷四年堯元年卒

古事記

曰書曰大字萬三首其先神武皇帝神八年之後為也博學
通於掌故願能屬文文武慶聖元年叙從五位下和銅
四年進一級是年九月詔安萬侶曰朕聞諸家所傳
帝位事既違正美辭多加虛偽及今不正後世心失
真斯乃邦家之往得王化之鴻基也其其撰錄帝位討

穀曰神冊詔定矣以備國家法典將法後世時有舍人
稱曰河祀者年于八為人聰明強記觸目誦以入身勤
心上親詣河祀帝皇原次前代曰聞令誦羽之萬侶乃改
心曰傳謬錯取於河祀之所誦始乎大古迄乎推古勒成一
家言凡三卷次曰古事記明年正月書成以錄是八年
果進至後四位是年初為寺長拜民部卿天長元年
年贊曰安萬侶撰古事記蓋有所感而作雖曰奉詔撰錄
使道也獻呈身不則美秋受詔明年正月地上何成之速
自神武迄于仁神撰重端慈大伴而迄至仁德肇祿
文明義倫迄于上白成于下上下咸知祀義其後達至
於用明始有有司南之職於是成爲自惟時裁逆敢
行固自誰何逆巨擅廢立以女統男司農之官不無感於

當時所感而起不能不序上世所以為終於推古者蓋
致意焉爾夫太古渾敦之元流混茫若存若亡其或
所傳亦重又不雅馴此聖華所以新於唐虞也即新
於神武唐才不失麟經之意焉若夫文巧拙非所論也

日本書紀 三卷

東國 三卷

曰書云親王名舍人天武才三子也世體敏好學博涉諸子之書
慶雲四年上日本書紀先是年太子萬侶征清人等奉為國史
至是始成記三卷系圖一卷聖武元年七年堯年二十歲
賢曰國傳載天皇地皇人皇各萬八千歲此大七地五之所
由擬也先儒有曰唐虞以前雖有書又其無不經孔子刪書
新唐書是書者之有尊守也然 我邦借史自親王始

其功正矣若夫取舍在且人尔

別式 三卷

石川年三撰

曰書石川年三者武內後為也性真率廉謹好學通經史尤
擅律酒上嘗詔公卿各言政事得失年三上便宜曰臣聞治
官要執律令為政必須格方今科條之繁難著屬簡別式
之文未有制作伏乞作別式年 律令並行乃作別式三卷
各以其政繫於年司雖未施行頗有效用焉

萬葉集

曰書五大伴家持者大納言旅人子也少好學涉經史兼通
兵法又以善國風知名初播諸兄弟家持奉詔述古作國
風及曰萬葉集家持之力蓋長久云

四

懷風藻

淡海三和抄

曰書云淡海三和者皇太子大友三曾孫也性聰敏博涉羣書以文學享石上宅嗣父業一將延唐四身卒于官向陽林公曰懷風藻三和所造也其所徵尤有概焉

萬葉集

曰書云稱諸兄者敏達帝皇太子難波曾孫也少親敏於國風深有所造初諸兄奉詔與大伴家持等造新羅國風歌采詩而取其可觀風俗者及曰萬葉集行于世贊曰凡藝業有相掩者顯於後者必隱於此諸兄學才世之間焉是掩於國風也若夫造輯求將落之所及也讀其表文而知其學才其大也而論道為獲入于台室歟

氏部省例 二十卷

和氣清麻呂抄

曰書云和氣清麻呂者皇仁帝皇太子輝石嗣之孫才俊後南島也所著三和者例二十卷傳于世

東國通鑑

常山棲筆餘湯淺云吾日本の祖々夫の太伯の末の事也
也昔書に載る太伯の日本小書に論
談乃抄抄林春翁事通鑑の序乃者
基我王述の事
証謂の事
子書の事
祖武天皇の御時山抄

四庫全書

曰書曰事記其真贋相錯也書の中同是陰神陽神の
御事もくも其語も事も作も河に觀喜冤家信
厄難海もくも心も根葉汚穢もくも事も心も
初命も奉も世も天子も奉も其の書の中作も心も
其片も讀もくも事も人も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も

日本書紀

曰書曰事記其真贋相錯也書の中同是陰神陽神の
御事もくも其語も事も作も河に觀喜冤家信
厄難海もくも心も根葉汚穢もくも事も心も
初命も奉も世も天子も奉も其の書の中作も心も
其片も讀もくも事も人も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も

今一焉難之是也今人親王天武
の皇子也其
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も
其の書の中作も心も其の書の中作も心も其の書の中作も心も

日書と日本文字の記号。也今の刊本讀海へは
三翰の主と三翰の吏と其の多あり。又
又日本文字の記号。又腕事記号。又
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。

梅園茶話

羽林宗鑑

日書と日本文字の記号。也今の刊本讀海へは
三翰の主と三翰の吏と其の多あり。又
又日本文字の記号。又腕事記号。又
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。

大平記

甲陽軍鑑

日書と日本文字の記号。也今の刊本讀海へは
三翰の主と三翰の吏と其の多あり。又
又日本文字の記号。又腕事記号。又
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。

大日本史

采花物語

日書と日本文字の記号。也今の刊本讀海へは
三翰の主と三翰の吏と其の多あり。又
又日本文字の記号。又腕事記号。又
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。
又腕事記号。又腕事記号。又腕事記号。



